大学生が群れてばかりでどうする
孤独を知ることが自立ということ
干渉されずに自分を確認する場だ

一歩先のあなたへ

永田和宏

16 ひとりでいることのカッコよさ

一年ほど前であろうか、ある新聞で「ぼっち席」という報道があった。京都大学の学生食堂で、テーブルに仕切りを設けて、ひとりで飯が食えるようにしたところ、すこぶる好評であったのだという。大きなテーブルでひとり飯を食うのは、まわりの人間から友達がいないと思われるようで嫌だが、仕切りがあると、まわりの視線を気にせず、落ち着けるのだという。ひとりぼっちで食べるから「ぼっち席」。

この気分はわからないではないが、ここで必要以上に意識されているのは、〈人の目〉である。その〈人の目〉が、黙って、しかしひしひしと伝えてくるのは、「友達がいない人間は駄目人間」なのだというメッセージであろう。

この意識は、若い世代には、先天形質のように、どこか精神の深いところに刷りこまれているような気さえする。ひとりで居ることの不安に耐えかねて、いつも友達と一緒に行動しようとする。それができない子は「はみご」などと呼ばれて、いじめの対象になったりもする。

日本は長いあいだ、村社会であった。村社会では結束しなければそれぞれが生きてゆけない。みんなと一緒に行動できない人間は村八分になり、村落共同体のなかでは、やっていけなくなる。

現在の子供たちの社会を見ていると、この村八分の意識が強く生き残っているのを感じざるを得ない。いじめの多くがそこに根を持ち、いじめは直接的暴力という以上に、村八分的無視（シカト）によるものが多く、増加傾向にあるという。

そもそも友達と一緒にいることがあるべき姿であるという観念は、どこで醸成されるものなのだろうか。小学校から、すでに仲間はずれが生み出されている。してみれば小学生がどこからそれを学習するのか。

おそらく親や先生が、ひとりでいるのは悪いことという方向へ無意識のうちに子供たちを導いてしまっているのではないか。学校でも家庭でも、「いいお友達を作りましょうね」というメッセージが繰り返される。常時そんなメッセージに晒（さら）されつづけていると、友達を持てないことは自分に非があるからだと思い込み、自分を責める。いつも友達に囲まれている子が輝いていて、友達がいない子はくすんでいる。そんな子がいじめの対象になる。

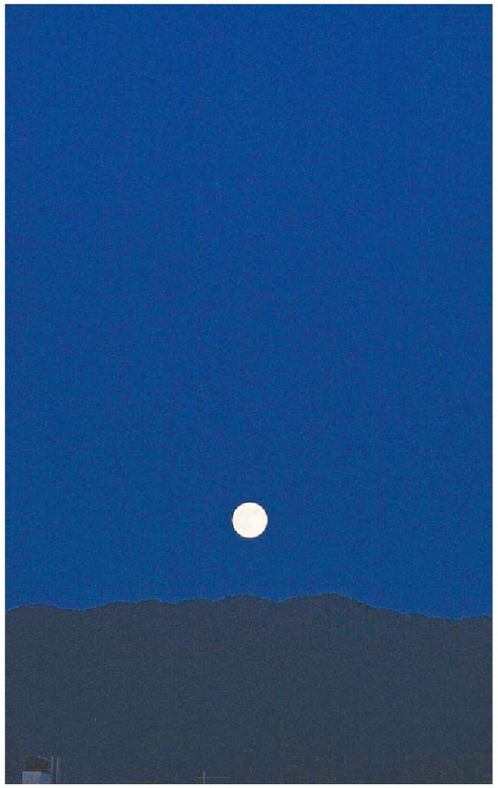
小中高と続いてきたこんな構図が大学にまで及んでいるとすれば、由々しきことと思わざるを得ない。小学生や中学生に、ひとりになりなさいとは言えないが、大学生にもなって、群れていなければ不安で仕方がないというのは、これまた異常である。そんな異常な状態の顕在化として「ぼっち席」があるのだとすれば、いよいよ学生に孤独になることの意味と価値をきちんと伝える必要がでてくるだろう。

「友達がたくさんいるということは、友達が全然いないことである」とは、アリストテレスの言葉らしい（『世界ことわざ名言辞典』講談社）が、自分の体裁を守るためだけの仲間であるとすれば、かの哲人の言葉を否定するのはむずかしかろう。

一日のうち、ひとりでいる時間をどこかで確保すること、進んで孤独になる時間を確保すること。そんな誰からの干渉もない場所でのみ確認できる自分というものがある。人間は本来はひとりでいるものであり、たまに友達と一緒になるというのが基本なのだ。

ひとりで堂々と飯を食う。それは格好のいいものであると思える環境を作りたい。大学生に今更（いまさら）ひとりになりましょうと教えることはばかげているが、孤独を知ることが自立ということであり、孤独のなかでしか自分が自分であることの確認はできないものなのだということは確認しておいてほしいと思う。

孤独を恐れてはならない。



満 月

京都産業大教授（細胞生物学）、歌人

※コラムへの感想をメールでお寄せください。minna@mb.kyoto-np.co.jp

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます